

# 〈身体的な男性優位〉神話はなぜ維持されるのか

## —スポーツ実践とジェンダーの再生産—

羽田野 慶子

### 1. 問題の所在：〈身体的な男性優位〉神話とスポーツ

カオリ 3年生の夏の大会の時に、何かみんな、最後の決定戦の時に見てたら、「かっこよかったな」って思ったんですよ、その時に。それで、仲間っていうか、何か上のすごい高い存在みたいになっちゃって、尊敬するような人になっちゃったんですよ、それ見てから。最後、見せた涙とか見て「すごい。やっぱり男子はすごいな」〔と思った〕。

(2000年3月のインタビューより。名前は仮名、括弧内引用者注、以下同じ。)

これは、関東地方のある公立中学校の女子柔道部員が、同じ柔道部の男子部員に対する自らの考えについて語った言葉である。彼女たちは中学1年のときからずっと同じ柔道部で男子部員と活動をともし、団体戦での関東大会出場をともし目標に掲げ、男子と変わらない厳しい練習に耐えてきた。3年生の夏の大会で、男子団体チームは関東大会出場をかけた決定戦まで見事に勝ち進む。惜しくも敗れはしたものの、強豪校を相手に善戦した彼らの活躍は、関係者にとって印象深い出来事となった。先に紹介した女子部員の言葉は、その試合を応援していたときに抱いた彼女の思いを述べたものである。

実は、同じ大会で彼女の所属する女子団体チームは上位入賞を果たし、関東大会の出場権を獲得した。大会成績からすれば男子より良い結果を残しているにもかかわらず、彼女たちはなぜ男子部員を自分たちより「上」の存在と認めているのだら

うか。

本稿は、中学校の柔道部におけるフィールド・ワークをもとに、身体能力、とりわけスポーツに関わる身体能力をめぐるジェンダー間の関係が、常に男性が女性に優るものとして人々に意識されるのはなぜなのか、そのメカニズムを明らかにしようとするものである。

「ジェンダー」という語が一般に定着した現在でも、身体能力における性差の存在は、「ジェンダー」ではなく「セックス」の一部として自明視されている<sup>(1)</sup>。しかし、90年代以降のポスト構造主義フェミニズムが、生物学的性差（＝セックス）もまた社会的・文化的実践により構築されたジェンダーであると喝破したように（Butler 訳書 1999, 29頁）、身体能力において男性が常に女性に優るという信念は、平均における男女差の存在を個別の男女差に敷衍した結果産み出された誤解に過ぎない（Volgler & Schwartz 1993, 伊藤 2001）。本稿では、「男性は女性よりも身体能力において優れている」というジェンダーをめぐる信念を、〈身体的な男性優位〉と呼ぶこととする。〈身体的な男性優位〉は、身体的な性差の存在を絶対視する本質主義的なジェンダー観に基づく「神話」（Barthes 1954）である<sup>(2)</sup>。〈身体的な男性優位〉の中身は、①身長や骨格など体型に関するもの、②筋力や走力など体力・運動能力に関するもの、③攻撃性や暴力性など身体使用の志向性に関するもの、の3つがさしあたり想定できるだろう。これらはそれぞれ「男性の方が体が大きい」「男性の方が運動能力が高い」「男性の方が攻撃的である」といった形で、男性が女性よりも上であることを当然視する言説と実践の蓄積によって神話化されている。こうした一連の〈身体的な男性優位〉神話の維持／再生産に大きな役割を果たしているものの一つが運動・スポーツという問題領域である。

日本における「ジェンダーと教育」研究は、従来、主として職業達成・教育達成のメカニズムがいかに関係するかにジェンダーによる分割を包含しているかを問題化してきた。しかし、こうした「平等主義アプローチ」（＝リベラル・フェミニズム）による研究が一定の成果を上げてきた一方で、「教育達成に直接関連しないように見える現象」は周辺化されてきたと言われる（中西・堀 1997, 85頁）<sup>(3)</sup>。スポーツという領域もまた、そのようにして周辺化されてきた現象の一つである。

ここで、〈身体的な男性優位〉神話とジェンダー概念との関係について確認しておきたい。かつて Delphy (1989) は、ジェンダーが「男」／「女」という二つの項から成る概念ではなく、「男／女」という分割それ自身という一つの概念として捉えられるべきものであること、そして分割された「男／女」の関係は非対称的であり、

## 〈身体的な男性優位〉神話はなぜ維持されるのか

男女間の序列がジェンダー概念に含まれていることを指摘した。ジェンダー概念をこのように理解するならば、ジェンダー研究の対象は、「男というジェンダー／女というジェンダー」という二つのジェンダーではなく、男女の<sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup>関係性という一つのジェンダーとなる（上野 1995, 12頁）。

このようなジェンダー理解に基づいて概念化された社会学用語が、「ジェンダー秩序」と「ジェンダー体制」である。ジェンダー秩序とは、社会に通底する歴史的に構成された男女間の権力関係を表す概念であり、ジェンダー体制とは、ジェンダー秩序に基づいて産出された個別具体的な社会制度のあり方を指す（Connell 訳書 1993, 161, 189頁）。個々のジェンダー体制の構成原理であるジェンダー秩序は、「性別分業」と「異性愛」という二つのパターンとして把握することができる（江原 2001, 120-158頁）。本稿が扱おうとする〈身体的な男性優位〉は、男性に〈身体的強さ〉を、女性に〈身体的弱さ〉を意味付与することによって、男女に異なる役割を割り当てる「性別分業」と、男女の対関係を自明視する「異性愛」の両方のパターンを正当化するジェンダーの神話として位置づけることができる。〈身体的な男性優位〉というジェンダーの神話は、スポーツという制度をめぐる社会構造のなかで生成する具体的なスポーツ実践を通じて維持／再生産されている。

筆者は、1999年4月から2000年7月にかけての約1年半、関東地方の公立A中学校の柔道部でフィールド・ワークを行う機会を得た<sup>(4)</sup>。以下では、この調査で得たデータを用いながら、中学校でのスポーツ活動という特定の場において、〈身体的な男性優位〉神話がどのように維持されているのかを具体的に検討していく。

## 2. A中柔道部という世界：活動内容におけるジェンダーの平等

はじめに、A中学校と柔道部について簡単に素描しておこう。A中学校は1学年4～5クラスで生徒数480名の中規模校である。部活動は盛んで、文化部10、運動部12の合計22部が置かれ、生徒の9割以上がなんらかの部活動に参加している。複数の運動部が県大会への出場経験を持っており、中でも柔道部は、私立の強豪校がひしめく中、県大会はもちろん関東大会出場も狙える有力チームとして地域で知られた存在である。99年度の部員数は計20名（男子14、女子6）で、内訳は3年生8名（男子6、女子2）、2年生9名（男子6、女子3）、1年生3名（男子2、女子1）であった。A中柔道部は、正確には「男子柔道部」と「女子柔道部」とに組織上分かれているのだが、顧問のT先生が男子部と女子部をかけもちしているため、普段の活動は男女一斉に行っている。そのため部員たちは、普段から男子部／女子部を

区別しておらず、「『柔道部員』って言われたら〔男女を問わず〕全員〔が頭に浮かぶ〕」（3年男子キャプテン）というように、男女全員が〈柔道部〉という同一の集団として認識されている。

柔道部では、平日と学校のある土曜日<sup>(5)</sup>はほぼ毎日、放課後に練習が行われる。休日の土日にも月に2回程度対外試合等が入る。つまり、最低でも週に5日は活動が行われることになる。これに加え、毎朝始業前に早朝練習として筋力トレーニングを行う。平日の放課後練習は「外錬」と呼ばれるグラウンドでのトレーニングからスタートする。「外錬」は全員体育着で行う。最初に1500メートルのランニング、続いてグラウンド脇にある鉄棒付近で、懸垂やスクワットを始めとする一連の基礎トレーニング・メニューをこなす。「外錬」に要する時間はおよそ40-50分である。「外錬」が終わると、全員柔道着に着替え、校舎内にある武道場での練習が始まる。体重別で同じくらいの階級で、技術的にも同程度の者同士がペアを組み、「打ち込み」「投げ込み」「乱取り」といったメニューをそれぞれ時間を計りながら十数本ずつ行う。これらのメニューを一通り終えたら、最後に柔軟体操を行う。こうした一連の武道場での練習は2時間から2時間半に及ぶ。

こうした柔道部の練習は、運動部の盛んなA中の中でもとりわけ厳しいものとして知られている。A中で柔道部に入るということは、他の部に突出して厳しい練習に耐えなければならないという意味で、一般の生徒からは「ある意味特別なこと」<sup>(6)</sup>と見なされている。対外試合が多く、たびたび上位に入賞する柔道部は、全校生徒の前で表彰される機会も目立って多い。表彰数の多さは、練習の厳しさを裏付けるものとして、柔道部の「特別さ」を他の生徒たちにより強く印象付けている。

このように、校内で最も厳しいとされる柔道部にあえて入部するということは、男子にとってもそうだが、女子にとっては余計に「特別なこと」と言える。なぜなら、A中ではほとんどの運動部が男女別に活動を行っており、活動内容も男女で異なるのが一般的であるが、その中で、柔道部だけは基礎トレーニングから武道場での乱取りに至るまで、男女共通の練習メニューが組まれており、性別による練習内容の違いは基本的に存在しないからである。男子にとっても「きつい」とされる練習に女子もまったく同等に参加しているという点は、他の運動部にはみられない柔道部だけの特徴である。言うなれば、柔道部の女子部員は、A中の女子生徒の中でもっとも厳しい運動に従事している者たちと位置付けられるだろう。

〈身体的な男性優位〉神話はなぜ維持されるのか

### 3. 柔道部のジェンダー体制：活動空間におけるジェンダーの分離

#### 3.1. 武道場の「男子エリア」と「女子エリア」

男女がまったく同じ練習メニューを課されるというA中柔道部の活動は、性別による差異的処遇の存在しない、ある意味で「先進的」なスポーツ実践例のように見えなくもない。しかし、男女が同じ時間、同じ活動を行うということは、性による区分が解消されることを意味するわけではない。

最初の練習メニューであるグラウンドでの1500メートル走では、柔道部員全員が列をなしてランニングを行うが、そこでの並び方は、前方に男子部員、後方に女子部員といつも決まっている。次の基礎トレーニングでは、男子と女子が鉄棒の前にそれぞれ別の列を作って並ぶ。二人ずつ組んで行うトレーニングでも、男子は男子同士、女子は女子同士で組む。掛け声などで練習の指示を出すのは3年生の男子キャプテンである。女子のキャプテンは、女子部員に指示を出すことはあっても、男子を含めた柔道部員全体に指示を出すことはない。全体を取り仕切るのは、あくまでも男子キャプテンである。男子部員たちと女子部員たちは、確かに同じ練習に打ち込んでいるが、決して入り混じることはなく、男女の部員の間には、まるで見えない境界線が引かれているかのように、男女分離の位置関係が終始保たれる。

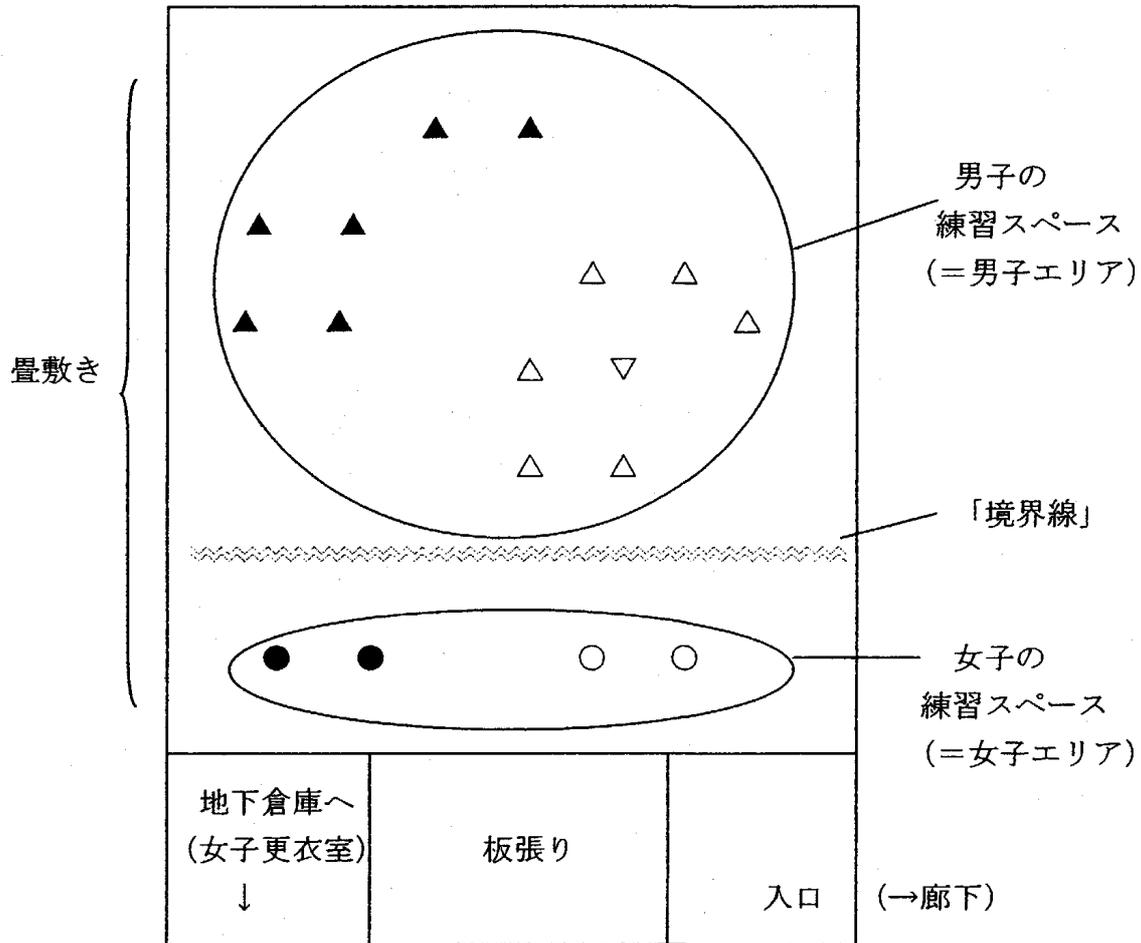
続く武道場での練習では、そのような男女分離の様相をよりはっきりと見て取ることができる。図1は、ある日の武道場での練習における部員の位置関係を示したものである。武道場の入り口から見て奥の方に男子、手前に女子が場所を取っていることがわかる。打ち込み練習の組み合わせは、ここでも男子同士、女子同士のみである。武道場での練習の間、図示したような男女の位置関係はほぼ一貫して維持される。女子部員たちが男子部員のいる場所にせり出して行くこと（あるいはその逆）は滅多になく、ここでも、あたかも見えない境界線が引いてあるかのように、男子と女子の練習スペースが重なり合うことはほとんどない。この男女間の「境界線」が何かの弾みで越えられた場合には、次のような光景が繰り広げられた。

(フィールド・ノートより)

——2年生の男子部員二人が乱取りをしているうちに女子部員の居る場所に入り込んでしまう。2年女子は動く場所がなくなるとまどっている。その様子に気づいた2年男子の会話。

カズヤ(2年男子) (ケンに向かって) ここは女子のエリアだと。

図1 武道場における部員の位置関係<sup>1)</sup>



【記号の意味】<sup>2)</sup>

- 3年女子, ○ 2年女子
- ▲ 3年男子, △ 2年男子, ▽ 1年男子

<注>

- 1) 1999年5月6日の放課後練習での様子を図示したものである。
- 2) この日、1年女子は欠席、2年女子1名は早退、1年男子1名はこのとき席を外していた。

ケン (2年男子) (カズヤに向かって、ふざけるように) 失礼だろ。

カズヤとケンは男子のいる奥のスペースへと移動する。二人が場所を空けるのを待っている2年女子に対し、その様子を見ていた3年女子の一人が事態をフォローするように声をかける。

アヤ (3年女子) (「境界線」を指差して) ここ有刺鉄線があったりする。越えたとビリビリビリ…って、なーんでこんな話してるんだ (笑)。

(1999年4月19日)

## 〈身体的な男性優位〉神話はなぜ維持されるのか

このように、武道場における男女間の「境界線」の存在は、部員たちに明確に意識されており、双方の「エリア」を踏み越えることは例外的なこととして認識されている。言ってみれば、武道場の中で「境界線」より奥のスペースが「男子柔道部」の練習場所であり、それより手前の余ったスペースが「女子柔道部」の練習場所となっているのである。部員たちは、この男女間の「境界線」について次のように述べる。

(筆者の「どうして武道場で男女の場所が分かれているの？」との問いに対して)

タクヤ (3年男子) 勝手に多分、分かれていると思うんです。

ヒロシ (3年男子) 自然になんか、あぁなってます。

タイチ (3年男子) 暗黙の了解で分かれています。

アヤ (3年女子) なんかあまり気にしたことがなかったんですけど、なんかいつの間にか女子、男子になってたんで。

カオリ (3年女子) 特別、何か意識しているわけじゃないんですけど、なんかあの位置、あの位置…。私が一年生のときからなんか、あっちのほう〔武道場の入口に近い方〕で練習してたんですよ。いつものしやすい位置っていうか。あんまりど真ん中、陣取れないじゃないですか、やっぱりなんか。私は何か、ちょっと男子は多いんで、男子のほうがスペースがないとパワフルなんで、男子のほうが〔広いスペースを使う〕って感じも、「そうなのかな」って、そう言われると思う気がするんですけど。

(いずれも2000年3月のインタビューより)

多くの部員は、武道場での練習場所の分離は、顧問の先生や男子キャプテンが決めたわけではなく、「いつの間にか」「自然に」「勝手に」部員たちが分かれた結果であるという。また、最後の女子部員の証言によれば、武道場入口付近のスペースは、1年生のときから女子部員にとって「いつものしやすい位置」であったという。これには、現在3年生である彼女が新入部員であった2年前、女子部員は1年生のみであったということも関係しているだろう。男子の先輩たちが練習しているような「ど真ん中」には入っていきづらかったのだ。しかし、自分たちの学年が上がり、女子部員の数が増えてからもなお、彼女たちが堂々と「ど真ん中」を陣取ることにはなかった。そして今となっては、男女がこのような形で分かれることが「暗黙の了解」となっている。

図1を見ればわかるように、男女の練習スペースを比較すると、部員の人数に応じて男子はより広く、女子は細長く狭い。こうした男女のスペース配分は、男女の人数比に応じて割り当てられたものとして考えれば公平であるように見えなくもない。しかし、乱取りの練習などでは試合を想定したランダムな移動が行われるのが普通である。一人ひとりが移動可能な面積として考えてみると、男子は女子のおよそ3倍のスペースを移動できるのに対し、女子はその3分の1の細長く狭いスペースの中で限られたパターンの移動しかできないことになる。したがって、一人当たりの移動可能面積という捉え方をすれば、人数に応じて女子の練習スペースが狭く割り当てられていることによって、女子の移動範囲が男子に比べて制限されていることが理解できるだろう。

このように、A中柔道部では、活動内容におけるジェンダーの平等が確保される一方で、活動空間においてはジェンダーの分離が支配している。部員たちは、男女を問わず〈柔道部〉という一つの集団としてお互いを認識していながら、具体的な活動場面では、あたかも「男子柔道部」に「女子柔道部」が付随しているかのようなジェンダー体制を維持するのである。

### 3.2. 「境界線」を越える試み

武道場における男女間の「境界線」は、部活の練習時間を通じて基本的には常に維持されている。しかし、女子部員の中には、この「境界線」をあえて踏み越えようとする者も見受けられた。この現象がみられたのは、比較的移動のはげしい「立ち技乱取り」の練習中である<sup>(7)</sup>。初めは女子のエリア内で組んでいた女子同士の組が、途中から男子のスペースである武道場の奥の方へあたかも自然に移動していった。

(フィールド・ノートより)

「立ち技乱取り」の途中、2年女子(ミホコ)と組んでいた3年女子(カオリ)が、「女子エリア」から自然に移動し、武道場の中央で乱取りを始める。周りの部員の反応はとくにない。(…中略…)先ほどと同じ3年女子(カオリ)が1年男子(ユウキ)と組んでいる。最初は女子エリアで組んでいたが、途中でカオリがユウキを奥のほうまで連れて行って再び組み始める。この出来事に触発されたのか、別の3年女子(アヤ)と2年男子(ツヨシ)の組も、自然と中央より奥の場所で組み始めた。(…中略…)今度は2年女子(リカーヒトミ)の組が、最初からかな

## 〈身体的な男性優位〉神話はなぜ維持されるのか

り中央で組み始めた。他の部員はとくに気にしている様子もなく、あたかも普段から男女の境界無く乱取りが行われているかのようである。男子と女子の「境界線」が、一時的に見えなくなった。

(1999年7月7日)

「境界線」を越える試みを率先して行っていたのは、3年女子のカオリである。彼女が乱取り相手の後輩女子部員とともに武道場の中央付近まで移動していったことをきっかけに、武道場に厳然と存在していたはずの男女の「境界線」は、みるみるうちに消された。彼女の「越境行為」を見咎めようとする者はいない。前節(3.1.)に見た、女子エリアに入ってきた男子を先輩女子部員がやんわりと追い返した場面と比較してみよう。女子が男子エリアに進出することは、実のところ、さほど厳密に禁止されているわけではないのである。しかし、こうして一時的に解消されていた「境界線」は、次の練習メニューが始まる頃には再びいつも通りの姿を現した。彼女がいくら「境界線」を越えてみても、それはあくまでも一時的な現象にとどまり、「境界線」の存在を根本的に無化することにはつながらない。一体なぜだろうか。

カオリは、「境界線」を越える行為について次のように述べる。

カオリ 女子は何かT先生には言われるんですけど、[場所が狭いので]何か壁際に行ったら[乱取りを]やめるとか、そういう感じが多いんですよ、うちの子たちとやっていると。後輩とやっても分かるんですけど。私は、けっこう引張ってって、[武道場の]中[の方に]入れて、続けようって思うんですけど、何か壁際、来ちゃったら、ぱっと放しちゃうって感じで、「しょうがないか」みたいな感じ。私はもう連れてって、もう続けるって、そういう感じなんですよ。

筆者 何か見たことあるわ(笑)。

カオリ なんですけど、何か後輩とかだと、ぱっとやめちゃって、中、行って、また最初からって、そういう感じなんです。それは、ちょっと気に入らないんですけど。

筆者 そう。

カオリ それはしょうがないかなと思って。そういうのがあるんで、なかなかその枠から出れないのかなって。

(2000年3月)

彼女は、「女子エリア」という「枠」から出ようとしないうちの後輩の女子部員たちをはがゆく思っている。男女の「境界線」が解消されない原因のひとつは、多くの女子部員が「女子エリア」という「枠」を出ようとしないうちにあるといえよう。

女子部員が「境界線」を越えて男子のスペースで乱取りを行ったとき、男子部員たちは何ら気にするそぶりを見せなかった。このことは、女子を「女子エリア」内に閉じ込めようとする男子側の明示的な圧力は存在しないことを示している。にもかかわらず、なぜ彼女たちは自分たちの「枠」に留まり続けるのだろうか。

理由はいくつか考えられる。第一の理由は、女子の「枠」に留まることのメリットである。男女間の「境界線」を一切なくすということは、女子にとって、常に男子に伍して練習スペースを切り開いていく必要に迫られるということでもある。男子の支配する空間に割り込んでいくリスクを負うよりは、狭くとも女子専用のスペースを確保する方が安心して練習できるという面もあるだろう。第二に、多くの女子部員が男女の「境界線」の存在に対して疑問を感じていないことが挙げられる。アヤがこの問題について、「あまり気にしたことがなかった」と述べているように、多くの女子部員にとって、男女の居場所が分かれることはごく「自然」なことであり、当たり前の日常なのである。分かれていることが当然だと思えば、「境界線」をあえて越えてやろうという意識は生れてこない。そして第三には、男子の側の問題が挙げられる。インタビューでは男子部員全員が、「境界線」の存在は「自然」であり、普段意識することもないと答えていた(3.1.節)。しかし、それでは「境界線」がなくなってもかまわないのかというと、決してそういうわけではない。ある男子部員は、もしもある日練習の最初から女子が武道場の奥で練習しているというようなことがあったら、違和感を感じると述べる。

筆者 [もしも] 女子がいきなり奥のほう [=男子の練習スペース] で固まって練習していたりしたら、「あれ、変だな」って感じ?

シンゴ 思います。ないですけど、そういうのは。まず、ないですけど。

筆者 なさそうだけど、もしそういうことがあったら不思議って思う?

シンゴ 「あれっ」と思いますよ。何かあったのか、聞きますね。聞きにくいですけどね。

(2000年3月)

## 〈身体的な男性優位〉神話はなぜ維持されるのか

彼は、女子が男子のスペースを占拠するような事態はありえないと言い切る。つまり、男子部員にとっては、女子は女子のスペースにいることが「当たり前」であるという基本的な前提がある。だからこそ彼らは、乱取りの最中に女子が男子のスペースに進出してきても、あくまでも一時的なことなのだから気にするほどのことではないと感じるのだろう。男子部員たちが「境界線」の存在を当然視する揺るぎない感覚が、女子部員による「境界線」の攪乱行為を無効化する見えない力になっているといえる。かれらが、男女が分かれていることが「自然」であると感じてしまう背景には、一体何があるのだろうか。

## 4. 〈男性優位〉を脅かさないメカニズム

## 4.1. 乱取り相手の選択における規則性：男女の組み合わせによる乱取り

次に、「乱取り」練習での男女の組み合わせについて検討する。武道場での練習は、基本的に実力の拮抗する者同士が組になって行われる。打ち込みではほとんどの場合、体格のつりあった同性・同学年の者が組を作り、その組み合わせを固定したまま、男子は武道場奥の「男子エリア」で、女子は手前の「女子エリア」で、その間の「境界線」を維持しながら練習が進行する。しかし、続く乱取りでは、一回毎に相手を変えるため、打ち込みでの組み合わせにはあまり見られない、学年を越えた組み合わせや、体重階級の異なる組み合わせが発現する。このような場合、技術や腕力において相対的に下の者が、より上のレベルにいる者に対して乱取りの相手を頼むことになっている。具体的には、下の者が相手になって欲しい部員のもとへ自ら近づいていき、「お願いします」と声をかけることで成立する。この場合も、基本的には男子同士、女子同士の組み合わせで行われることが多いが、時折り男女の組み合わせによる乱取りが行われる場合が見られる。男女の組み合わせによる乱取りは、一見すると、ジェンダーの分離を原則とする部内のジェンダー体制を攪乱する現象のように見える。

表1は、筆者の観察中に実際に発現した男女の組み合わせを表したものである。すべての部員を学年別・男女別に、概ね体重階級の軽い者から重い者の順に並べてある。「力量」の欄には、体重階級だけでは判別しがたい実力の目安を記した。表中の「○」「△」はそれぞれ女子と男子を表し、乱取りの相手を願い出た側の記号を黒く塗りつぶしてある。すなわち、「●→△」は女子から男子へ、「▲→○」は男子から女子へ声をかけて成立した組み合わせを表すことになる。

筆者の観察中に発現した男女の組み合わせは全部で9通りであった。これらの組み



## 〈身体的な男性優位〉神話はなぜ維持されるのか

合わせを検討してみると、乱取り相手の選択には一定の規則性を見出すことができた。すなわち、(1)女子が男子に相手を頼む場合は、同学年か下の学年の男子に限られる、(2)女子が同学年の男子に頼む場合は、男子の中で相対的に実力の低い者が選択されやすい、(3)男子が女子に頼む場合は、上の学年の女子に限られる、(4)女子に相手を頼む男子は、同学年の男子部員の中で相対的に実力の低い者に限られる、ということである。

いくつか具体的に見てみよう。まず、①～⑤の組み合わせは、いずれも女子から男子へ声をかけて成立したものである。①②の組み合わせに見られる部員Nは3年生の女子キャプテンで、女子の中で一番体格のいい選手である。彼女がもっとも頻繁に組み合わせを頼む男子は、同じ3年生の部員Rである(組み合わせ①)。Rは体格はいい方だが、団体戦のレギュラーではなく、個人戦でも目立った成績をあげていない。3年男子の中では相対的に技術が未熟な者である。Nが声をかけるもう一人の相手は2年男子の部員Iである(②)。この組み合わせは、後述するようにIからNに向けて願い出る場合も同時に観察されており、お互いに声をかけ合える対等な関係と見なされる。

③④の組み合わせに見られる部員Fは、2年生女子の中で唯一団体戦レギュラーを務めている。彼女が男子の中でよく組む相手は、同じ2年生の部員Iである(③)。彼は唯一の中途入部者であるため、2年男子の中で明らかに実力が一段低い部員である。その他、FがHと組む場合も見られたが(④)、このときはFが先輩女子部員にかなり強く促されてHに声をかけに行ったのが観察されており、自発的に声をかけることができるようになるまでにはしばらくの時間を要した。⑤の2年女子Eと1年男子Cとの組み合わせは、これも後述するように双方向的な関係である。以上のことから、女子から男子へ声をかける場合には、同学年の男子部員の中で相対的に力の低い者か、下の学年が選択されやすいといえる。

それでは逆に、男子から女子へ声をかける場合について検討してみよう。該当するのは⑥～⑨の組み合わせである。⑥は2年生の男子部員Iと3年女子Nの組み合わせで、先述した組み合わせ②の逆のパターンである。⑦～⑨は、1年男子Cと2年女子E、F、3年女子Mとの組み合わせである。Iは、先ほども登場した通り、2年男子の中でもっとも実力の低い選手である。また、1年男子Cは、柔道経験者である同じ学年のBに比べれば実力は低い。以上のことから、男子から女子へ声をかける場合は、同学年の男子の中で相対的に実力の低い者に限られており、彼らは必ず自分より上の学年を選択することがわかる。

乱取り相手の選択における以上のような規則性は、部員たちの意識の上で共有されている力関係のあり方を反映していると考えられる。第一に、同学年の中でもっとも技術の未熟な男子部員でも女子部員よりは「上」と見なされていることがわかる。女子が同学年の男子に声をかける場合には、同学年の中で最も技術の未熟な男子を選択する一方で、男子が同じ学年の女子に声をかける事例は一度も見られなかった。ということは、同学年の男女における力関係は絶対的に「男子>女子」という認識が共有されているということになる。第二に、「女子>男子」というジェンダー間の力関係の逆転現象は、常に学年の上下関係として読み替えられるということである。男子が女子に声をかける場合は上の学年の女子に限られるため、「先輩>後輩」の力関係に読み替えられ、男子の女子に対する基本的な優位性は覆されないのである。第三に、男子の優位性を脅かしかねない女子から男子への「身の程知らずな（思いがけない）挑戦」はあらかじめ禁じられていることがわかる。より実力の高い者に対して相手を頼むのであれば、女子が上の学年の男子へ声をかける組み合わせが成立してもおかしくないのだが、実際には一度も起こらなかった。下の学年の女子と上の学年の男子とでは、〈ジェンダー〉と〈学年〉という二重の「力の差」が存在する。このように、「力の差」があまりにも大きいと見なされる組み合わせは、暗黙のうちに許されていないと見るべきであろう。なぜなら、万一女子が男子を負かすようなことがあれば、男女の力関係は根底から覆されることになるからである。

以上のように、一見、部内のジェンダー体制を攪乱しているかのように見えた男女の組み合わせによる乱取りという現象は、「男子>女子」という力関係を覆さない限りにおいて、すなわち、〈身体的な男性優位〉という神話を侵犯しない形でのみ生起していたことが明らかになった。

#### 4.2. 男子部員の危機感

それではなぜ、〈身体的な男性優位〉を維持するのにこのような規則性が必要になるのだろうか。本来、本当に男子の絶対的な力の優位性が存在するのであれば、どのような組み合わせが生じてもかまわないはずである。次に挙げる男子部員の言葉は、その理由を示している。

筆者 もしもタイチくん、3年になってから例えばアヤさんから〔乱取りの相手を〕お願いされたらどう思う？

## 〈身体的な男性優位〉神話はなぜ維持されるのか

タイチ いや、どう思うっていうか、まず勝てるかどうかが心配。

男性調査者 誰が？

タイチ 自分が。

男性調査者 タイチが？

(2000年3月)

彼は3年男子の中で最も体格がよく、第三者から見れば女子に負けることなどありえないと思える部員であった。その彼ですら、本心では絶対に女子に負けないという確信を抱いているわけではないことがわかる。男子部員たちは、女子に対する絶対的な自信を持っているわけではなく、むしろ負かされるかもしれないという危機感を抱いているのである。

実際、そうした危機感が現実化する場面もある。毎年秋に行われる「学年別大会」は、各校が学年別に団体チームを組んで参加する試合である。原則として男子選手がメンバーに選ばれるが、男子の人数が足りない場合は女子をメンバーに含めることができる。そのため、一部の試合で男子対女子の公式戦が実現するのである。A中では前年度、男子のみで構成された2年生チーム(=現3年生)が他校の男女混合チームとあたり、一人が女子に負けるという「事件」があった。そのときの様子を知る他の部員によれば、負けた瞬間、彼はショックで呆然としていたという。また、調査年度の同じ大会でも、他校の重量級の男子が中量級の女子に一本負けするという「大事件」があった。このとき負けた男子選手は泣いていたという<sup>(8)</sup>。

〈身体的な男性優位〉の神話が強固に存在する一方で、男子は女子に負かされる不安に常に戦々恐々としている。彼らは、男子の絶対的な力の優位性というものは幻想でしかないことを実はよく知っているのだ。絶対的な真理であるかのように見える〈身体的な男性優位〉の神話は、常に突き崩されかねない脆いものである。だからこそ、乱取りの練習では「男子>女子」の力関係を脅かさない組み合わせだけが選択されるような規則性が必要とされるのである。

## 5. スポーツに埋め込まれた〈身体的な男性優位〉神話

個々のスポーツ実践は、常にスポーツ界全体、及び当該スポーツ競技をめぐる状況の影響下にある。A中柔道部において、一定のジェンダー体制が維持されているのも、それを攪乱する要因を常に無効化してしまうような社会的な文脈から自由ではないからである。

柔道の場合、明治期に講道館柔道が創設されて11年後には女子に門戸が開放されたが、形と乱取りを中心とし、女子が試合をすることは長らく禁じられてきたという歴史がある。女子柔道の競技化は1950年代以降、日本より先にオーストラリアやヨーロッパで始まった。今でこそオリンピック等で日本の女子選手の活躍が注目されているが、日本で最初に女子の大会が開かれたのは1978年であり、日本における女子柔道の競技としての歴史は意外なほど浅い（柳沢・山口 1992, 8-10頁）。国際柔道連盟 (IJF) によれば、柔道の競技人口に女性が占める割合は、段を持たない者で約2割、有段者では約1割であり、現在でも圧倒的に男性のスポーツであることが分かる (IJF 2003)。

女子柔道が柔道の歴史の中で男子の柔道と異なるものとして扱われてきたことは、段位の取得をめぐる、男女の昇段資格に若干の違いが設けられていることにも表れている。柔道の競技者にとって、初段の資格を取り、黒帯を手にするには、それまで培ってきた実力を形にするという象徴的な意味合いを持っている。A中柔道部では、男子は2年時に、女子は3年時にそれぞれ昇段試験を受けに行き、初段を取得することになっている<sup>(9)</sup>。筆者が観察した年、T先生は2年男子と3年女子へ同時にA中オリジナルの黒帯をプレゼントすることにしていたのだが、ちょうど3年生の修学旅行中に2年男子が先に黒帯を手にするという出来事があった。彼らはさっそく黒帯に巻き替え、嬉しさで顔をほころばせながらも、いつも以上の気合いで練習に取り組み始めた。「黒帯」が柔道に対する彼らのモチベーションを高めたことは明らかであった。数日後、修学旅行から帰ってきた3年女子は、自分たちより先に黒帯を巻いている2年男子の姿を目にする。このような形で黒帯取得時期に男女差が生じてしまうという事実は、女子部員が男子部員と同等の立場にはないのだということを象徴的に突きつけた。

昇段資格が異なるということは、女子の段位が男子の段位と同じではないということの意味する。男子の「柔道」と「女子柔道」とは、ルールは同じでも競技としては別物として位置付けられているのである。公式試合が通常男女別に大会が組まれているのも、それらが別の競技として位置付けられているからに他ならない。

同様のことは、他の多くのスポーツについてもいえることである。球技では男女でルールが異なるものが珍しくないし、そもそも男性あるいは女性しか参加しにくい環境にあるスポーツも多い。ルールや競技環境が同じ場合でも、たいていのスポーツは基本的に男女別に争われるため、同じスポーツに従事する女性と男性は、同じ競争に参加していることにはならない。スポーツにおいては、男女は初めから「異

## 〈身体的な男性優位〉神話はなぜ維持されるのか

なる競争」(吉原 1998)に組み込まれている。いわば、スポーツという領域全体が、男女を同等に競わせないようなシステムを有しているのである。スポーツにおけるジェンダー体制には、〈身体的な男性優位〉神話が埋め込まれているといえよう。

## 6. 〈身体的な男性優位〉神話はなぜ維持されるのか

これまでの検討から、冒頭に挙げた女子部員の言葉がなぜ発せられたのかが理解できるだろう。A中柔道部の男女部員は、同じ時間、同じ空間で、同じ練習を行っているにもかかわらず、徹頭徹尾、性別により異なる基準に貫かれていた。女子が男子と同様の練習をいくら頑張っても、男子と同じ土俵で競争することにはならない。男女は常に異なる競争に参加するため、たとえ女子が男子より優れた成績を修めたとしても、男子に勝ったことにはならないのである。女子部員は、自分より実力の優る男子との直接対決の機会を持たないまま、彼らと自らとを比較し、「男子にはかなわない」ことを了解していく。他方、男子は、女子の「身の程知らずな(思いがけない)挑戦」を受ける危険から常に守られており、そのため、認識レベルでの男子の普遍的優位性は傷つかない。〈身体的な男性優位〉の神話は、個々のスポーツ実践の中にあるこのようなメカニズムによって維持されている。そしてそのような個々の実践は、スポーツという領域全体がジェンダーにより分割されているというジェンダー体制によって産み出されていると同時に、そのようなジェンダー体制を絶えず構成する要素にもなっている。

本稿は、スポーツの実践というモメントを通して〈身体的な男性優位〉神話が維持されるメカニズムの具体的様相を示した。この問題は、「スポーツにおける男女の境界線を一切なくせばよいのか？」などという短絡的な議論に矮小化されてはならない。われわれが考えるべきことは、スポーツ実践が〈身体的な男性優位〉神話の維持に利用されているという事実を即して、神話をいかに解体するかということである。女子柔道部員に見られたような、部のジェンダー体制を攪乱させる実践の積み重ねは、場合によってはジェンダー体制のあり方そのものを変えていく契機になりうる。重要なことは、神話の存在を意識できるようなジェンダー・センシティブな感覚を育てること、そして、ジェンダー体制を変動させるような個々の実践をサポートしていくことではないだろうか。

## 〈注〉

- (1) 例えば、98年に東京都の中学生を対象に行われた調査では、「男は女より体力がある」という項目に82.3%が肯定的な回答を示している（羽田野 1999, 158頁）。
- (2) 本質主義的なジェンダー観の根本にあるのは生殖機能に関わる性差の存在という問題であるが、本稿では、運動・スポーツに関わる〈身体的な男性優位〉の問題に焦点化するものとする。
- (3) 「平等主義アプローチ」の限界が自覚された後、日本の「ジェンダーと教育」研究は、新しい枠組みとしてポスト構造主義フェミニズムの導入を提唱してきた（中西・堀 前掲, 西躰 1998）。本稿はポスト構造主義フェミニズムの経験的研究をめざすものである。

この動向に疑問を呈し、マルクス主義フェミニズムへの理論的貢献をめざすべきだとする意見もあるが（橋本 2003）、マルクス主義フェミニズムは、性別役割分業として要約されるような「労働の問題」には有効であるが、その背後にある「身体の問題」を十分に扱えないという限界をもつ（江原 1995, 22-36頁）。どの理論を採用すべきかの判断は、その研究が扱おうとする問題の質や水準によって異なるのであり、「ジェンダーと教育」研究もまた、特定のフェミニズム理論に固執する必要はないと考える。

- (4) 実施した調査の概要は以下の通り。観察期間のうち、99年4月～7月はほぼ週1回、放課後の活動を観察したほか、校外での公式試合にも同行した。その過程で、顧問教師、部員、OG、保護者に対するインフォーマルなインタビューを行った。8月以降はほぼ2ヶ月ごとに訪問し、可能な限り上記の対象に対するインタビューを継続した。3月下旬、卒業した3年生部員8名全員に対し、それぞれ30分～1時間半の録音をともなった個別インタビューを行った。さらに追加調査として、00年4月～7月にかけて、柔道部以外の部活動に参加する生徒に対する部ごとのグループ・インタビューを行った。なお、A中学校柔道部のフィールド調査は、矢野博之氏（現・大妻女子大学）と筆者との共同調査として行ったものである。インフォーマントとのラポール形成に際しては、矢野氏の力に拠るところが大きかった。また、本稿執筆にあたって共同調査者としての的確な示唆をいただいた。記して感謝したい。
- (5) 1999年当時は週5日制への移行期間中で、毎月第二、第四土曜日が休みとなっていた。

## 〈身体的な男性優位〉神話はなぜ維持されるのか

- (6) 2000年6月のインタビューにおける女子テニス部員の発言より。
- (7) ただし、頻度はごく限られており、観察期間中に筆者が確認できたのは2回だけである。
- (8) 1999年9月13日の矢野氏の報告による。
- (9) この黒帯取得時期の男女によるズレには、柔道の昇段資格に関する規定がかかわっている。詳細は講道館(1983)を参照のこと。

## 〈引用文献〉

- Barthes, Roland 1954, *Mythologies*, (=1967, 篠沢秀夫訳『神話作用』現代思潮新社).
- Butler, Judith 1990, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, (=1999, 竹村和子訳『ジェンダー・トラブル』青土社).
- Connell, Robert W. 1987, *Gender and Power: Society, the Person and Sexual Politics*, (=1993, 森重雄他訳『ジェンダーと権力』三交社).
- Delphy, Christine 1989, 「セックスとジェンダー」国立婦人教育会館『平成元年度女性学国際セミナー 性役割を変える』国立婦人教育会館, 23-35頁。
- 江原由美子 1995, 『装置としての性支配』勁草書房。
- 2001, 『ジェンダー秩序』勁草書房。
- 橋本健二 2003, 「第四章 教育と家父長制の再生産」『階級・ジェンダー・再生産』東信堂, 68-110頁。
- 羽田野慶子 1999, 「VI ジェンダー意識」西島央・藤田武志・矢野博之・荒川英央・羽田野慶子「中学校生活と部活動に関する社会学的研究」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第39巻, 156-160頁。
- International Judo Federation 2003, “Women’s Judo”, <[http://www.ijf.org/corner/corner\\_woman.php](http://www.ijf.org/corner/corner_woman.php)>, 2004年2月15日(最終アクセス日)。
- 伊藤公雄 2001, 「第7章 スポーツ教育とジェンダー」杉本厚夫(編)『体育教育を学ぶ人のために』世界思想社, 124-141頁。
- 講道館 1983, 「講道館昇段資格に関する内規・講道館女子柔道昇段資格に関する内規・講道館国際部審議会関係の取扱いについて」(財)講道館。
- 中西祐子・堀健志 1997, 「『ジェンダーと教育』研究の動向と課題」『教育社会学研究』第61集, 77-100頁。
- 西躰容子 1998, 「『ジェンダーと学校教育』研究の視角転換」『教育社会学研究』第

62集, 5-22頁。

上野千鶴子 1995, 「差異の政治学」井上俊他(編)『岩波講座現代社会学11 ジェンダーの社会学』岩波書店, 1-26頁。

Volgler, Conrad C. & Schwartz, Stephen E. 1993, "Women and Sport", *The Sociology of Sport: An Introduction*, Prentice-Hall, New Jersey, pp. 121-137.

柳沢久・山口香 1992, 『基本レッスン 女子柔道』大修館書店。

矢野博之 2000, 「III. 観察調査による事例研究: A 中柔道部生徒に対する観察調査から」西島央・矢野博之・荒川英央「中学生にとっての部活動の意味に関する実証的研究」第52回日本教育社会学大会配布資料, 20-34頁。

吉原恵子 1998, 「異なる競争を生み出す入試システム」『教育社会学研究』第62集, 43-67頁。

#### 〈謝辞〉

お忙しい中調査を許可して下さったA中学校の校長先生, 柔道部顧問のT先生, そして調査に協力して下さった柔道部員の皆さん, 保護者の皆さん, その他関係者の皆さんに心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

#### 〈付記〉

本稿は, 平成13-16年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))「中等教育における部活動の実態と機能に関する実証的研究: 新教育課程実施前後の比較を中心として」(研究代表者: 西島央), ならびに平成14-16年度文部科学省科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。

---

**ABSTRACT**

**How Is the Myth of “Male Physical Superiority” Sustained?  
Mechanisms of Gender Reproduction in a Junior High School Judo Club**

**HATANO, Keiko**

Research Fellow of Japan Society for the Promotion of Science,  
Graduate School, University of Tokyo  
7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0033 Japan  
Email: RXL16142@nifty.com

The purpose of this paper is to clarify the mechanisms for the reproduction and sustenance of the myth of “male physical superiority” through sport practice, using data from field research in a judo club at a junior high school. The myth of “male physical superiority” refers to the social belief that “males are superior to females in physical capabilities.”

The judo club is one of the best sport clubs of the school, and its training is the hardest. Unlike other sport clubs, boys and girls always practice together following the same practice schedule. However, during practice, it is found that they are always gender-segregated, and boy-dominated. That is to say, the gender equality of the practice schedule and gender segregation of the physical relationship are the gender systems of the judo club.

In the budo-jo (judo-training room), a fixed “borderline” can be observed between boys and girls. The practiced area for the girls is only a third of the size of that for boys. Girls occasionally try to pass across the “borderline,” but the subversion is only transitory, and the boys’ domination of the budo-jo never wavers.

Next, the paper analyzes boy-and-girl pairings for randori (technical training in pairs). When choosing a randori partner, weaker players must ask the stronger players. The boy-and-girl pairings seem like a subversion of gender segregation, but in reality a regularity can be seen in the pairing that does not subvert the male-dominated gender relations. For example, whereas a girl will ask a boy from the same year, boys will only ask girls who are their seniors.

Not only judo, but almost all sports have systems that segregate males and females, and prevents them from competing with one another. Gender systems in sport are utilized to sustain the myth of “male physical superiority.” The myth is reproduced by various sport practice, such as the ones observed in a judo club, which are produced from a gender-segregated sport system.